

Kokoro – Sensei and I – Parts 19-27 (Natsume Sōseki)

じゅうく
十九

はじめ 私 は理解のある女性として奥さんに対していた。私はその気で話しているうちに、奥さんの様子が次第に変わって来た。奥さんは私の頭脳に訴える代わりに、私の心臓を動かした。自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それなのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあった。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちっともそこに落ち付いていられなかった。底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中まで厭になったのだろうと推測していた。けれどもどう骨を折っても、その推測を突き留めて事実とする事ができなかった。先生の態度はどこまでも良人らしかった。親切で優しかった。疑いの塊りをその日その日の情合で包んで、そっと胸の奥にしまっておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

「あなたどう思っ^{おも}て？」と聞^きいた。「私からあ^あなた^なのか、それともあ^あなたの^{じんせい}人^{かん}世^{かん}観と^かか何^かとかい^いうもの^{もの}から、あ^あなた^なのか。隠^{かく}さ^さずい^いって頂^{ちやうだい}戴」

私は何も隠す気はな^なかった。けれども私の^し知^しら^らない^{ない}ある^{ある}もの^{もの}がそ^そこ^こに^に存^{そんざい}在^{ざい}して^{して}いる^{いる}と^とす^すれば、私の^{こた}答^たえ^えが何^なで^であ^あら^らうと、それが奥^{おく}さん^{さん}を満^{まんぞく}足^{ぞく}させる^{させる}はず^{はず}がな^なか^かった。そう^{そう}して^{して}私^{わたし}は^はそ^そこ^こに^に私^{わたし}の^{しん}知^{しん}ら^らない^{ない}ある^{ある}もの^{もの}があ^あると^と信^{しん}じて^{じて}いた。

「私^{わたし}には^は解^{わか}り^りませ^{せん}ん」

奥^{おく}さん^{さん}は^よ予^よ期^きの^{はず}外^{はず}れた^{とき}時^{とき}に見^ある^あ憐^{ひやうじやう}れ^{じやう}な^と表^と情^あを^らその^と咄^と嗟^さに^{あら}現^{ことば}わ^つした。私^{わたし}は^はす^すぐ^ぐ私^{わたし}の^{ことば}言^つ葉^つを^つ継^つぎ^つ足^つした。

「しかし先生^{ほしやう}が奥^{おく}さん^{さん}を嫌^{きら}って^ていら^らっ^しや^やら^らない^{ない}事^{こと}だ^だけ^けは^は保^ほ証^{しょう}し^しま^ます。私^{わたし}は^は先^{しん}生^{しん}自^じ身^{しん}の^{くち}口^{くち}から^{から}聞^きいた^と通^{とお}り^りを^つ奥^{おく}さん^{さん}に^つ伝^うえ^そる^つだけ^{かた}です。先生^{ほしやう}は^は嘘^{うそ}を^つ吐^かか^かない^{ない}方^{かた}で^でし^しょう」

おく なん こた
奥さんは何とも答えなかった。しばらくしてからこういった。

じつ わたくし おも こと
「実は私 すこし思いあたる事があるんですけども……」

せんせい ふう げんいん
「先生がああいう風になった原因についてですか」

「ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大變
らく
楽になれるんですが、……」

「どんな事ですか」

おくさん はい しぶ ひざ うえ お じぶん て なが
奥さんはいい渋って膝の上に置いた自分の手を眺めていた。

「あなた判断して下さって。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱られるから。叱られないところだけよ」

私 は きんちょう つばき の こ
私は緊張して唾液を呑み込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大變仲の好いお友達が一人あったのよ。その方がちょうど
そつぎょう すこ まえ し きゅう
卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

おくさん は私 の みみ ささや ちい こえ へんし
奥さんは私の耳に私語くような小さな声で、「実は變死したんです」といった。それは「どう
して」と聞き返さずにはいられないようないい方であった。

「それっ切りしかいえないのよ。けれどもその事があってから後なんです。先生の性質が
だんだんかわ き
段々變って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解って
いないでしょう。けれどもそれから先生が變って来たと思えば、そう思われもないの
よ」

「その人の墓ですか、雜司ヶ谷にあるのは」

「それもいわない事になってるからいいません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化できるものでしょうか。私はそれが知りたくって堪らないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」

私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

にじゅう
二十

私は私のつらまえた事実の許す限り、奥さんを慰めようとした。奥さんもまたできるだけ私によって慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合った。けれども私はもともと事の大根を攫んでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂う薄い雲に似た疑念から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉皆は私に話す事ができなかった。したがって慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、覚束ない私の判断に縋り付こうとした。

十時頃になって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐っている私をそっちのけにして立ち上がった。そうして格子を開ける先生をほとんど出合い頭に迎えた。私は取り残されながら、後から奥さんに尾いて行った。下女だけは仮寝でもしていたとみえて、ついでに出て来なかった。

先生はむしろ機嫌がよかった。しかし奥さんの調子はさらによかった。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜った涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた人の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺めた。もしそれが詐りでなかったならば、(実際それは詐りとは思えなかったが)、今までの奥さんの訴えは感傷を玩ぶためにとくに私を相手に拵えた、徒らな女性の遊戯と取れない事もなかった。もっともその時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかった。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必要もなかったんだと考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張合が抜けやしませんか」といった。

かえ とき おく
帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調子は忙しいところを暇を潰
させて気の毒だというよりも、せっかく来たのに泥棒がはいらなくて気の毒だという冗談
のように聞こえた。奥さんはそういいながら、先刻出した西洋菓子の残りを、紙に包んで私
の手に持たせた。私はそれを袂へ入れて、人通りの少ない夜寒の小路を曲折して賑やかな
町の方へ急いだ。

私はその晩の事を記憶のうちから引き抜いてここへ詳しく書いた。これは書くだけの必要が
あるから書いたのだが、実をいうと、奥さんに菓子を貰って帰るときの気分では、それほど
当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日午飯を食いに学校から帰ってきて、昨夜
机の上に乗せて置いていた菓子の包みを見ると、すぐその中からチョコレートを塗った鶯色のカ
ステラを出して頬張った。そうしてそれを食う時に、必竟この菓子を私にくれた二人の男女
は、幸福な一対として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅へ出はいるをするついでに、
衣服の洗い張りや仕立て方などを奥さんに頼んだ。それまで繻絆というものを着た事のない
私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねるようになったのはこの時からであった。
子供の無い奥さんは、そういう世話を焼くのがかえって退屈凌ぎになって、結局からだくすり
ぐらいの事をいっていた。

「こりゃ手織りね。こんな地の好い着物は今まで縫った事がないわ。その代り縫い悪いのよそ
りゃあ。まるで針が立たないんですもの。お蔭で針を二本折りましたわ」

こんな苦情をいう時ですら、奥さんは別に面倒くさいという顔をしなかった。

にじゅういち
二十一

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならない事になった。私の母から受け取った手紙
の中に、父の病気の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が
年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった。

父はかねてから腎臓を病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病は慢性
であった。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わ

なかった。現に父は養生のお蔭一つで、今日までどうかこうか凌いで来たように客が来る
と吹聴していた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機に突然眩暈がし
て引ッ繰り返った。家内のものは軽症の脳溢血と思ひ違えて、すぐその手当をした。後で
医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて
卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間があった。私は学期の終りまで待っていても差支えあるまいと
思つて一日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様子だ
の、母の心配している顔だのが時々眼に浮かんだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗めた私
は、とうとう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞いか
たがた先生の所へ行って、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。

先生は少し風邪の気味で、座敷へ出るのが臆劫だといつて、私をその書齋に通した。書齋の
硝子戸から冬に入って稀に見るような懐かしい和らかな日光が机掛けの上に射していた。先
生はこの日あたりの好い室の中へ大きな火鉢を置いて、五徳の上に懸けた金盃から立ち上る
湯気で、呼吸の苦しくなるのを防いでいた。

「大病は好いが、ちょっとした風邪などはかえって厭なものですね」といった先生は、苦笑
しながら私の顔を見た。

先生は病氣という病氣をした事のない人であった。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなつ
た。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だって同じ事でしょ
う。試みにやってみるとよく解ります」

「そうかね。私は病氣になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてる」

私は先生のいう事に格別注意を払わなかった。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し
出た。

「そりゃ困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」

先生は奥さんおくさんを呼んで、必要ひつようの金額きんがくを私の前まえに並ならべさせてくれた。それを奥おくの茶箆ちゃだんす筒なんか何かひきだしの抽出ひきだしから出して来た奥おくさんは、白しろい半紙はんしの上うへへ鄭寧ていねいに重かさねて、「そりゃご心配しんぱいですね」といった。

「何遍なんべんも卒倒そつとうしたんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書かいてありませんが。——そんなに何度なんども引ひッ繰くり返かえるものですか」

「ええ」

先生の奥ははおやさんの母親ははおやという人も私の父ちちと同じ病な気で亡なくなったのだという事ことが始めはじめて私わたしに解はつた。

「どうせむずかしいんでしょう」と私がいった。

「そうさね。私わたしが代かわられれば代かわってあげても好はいが。——嘔はきけ気けはあるんですか」

「どうですか、何とも書かいてないから、大おお方かたないんでしょう」

「吐はきげ気けさえ来こなければまだ大だい丈じょう夫ぶですよ」と奥おくさんがいった。

私わたしはその晩ばんの汽き車しゃで東とう京きやうを立たった。

にじゅうに
二十二

父ちちの病びやう気きは思おもったほど悪わるくはなかつた。それでも着ついた時ときは、床とこの上うへに胡あぐら坐ざをかいて、「みんなが心しん配ぱいするから、まあ我が慢まんしてここう凝じつとしていいる。なにもおう起いきても好いいのさ」といった。しかしその翌よく日じつからは母ははが止とめるのも聞きかず、とうとう床とこをあげさせてしまった。母ははは不ふ承しょう無む性しょうに太ふと織おりの蒲ふとん団たをたたきながら「お父とうさんはお前まえが帰かえって来きたので、急きゆうに気きが強つよくおおなりなんだよ」といった。私わたしには父ちちの挙けん動どうがさして虚きよ勢せいを張はっているようにも思おもえなかつた。

私わたしの兄あにはある職しょくを帯おびて遠とい九きゆう州しゅうにいた。これは万まん一いちの事ことがある場ば合あいでなよういいなければ、容よう易いに父ちち母ははの顔かおをみる自じ由ゆうの利きかおない男おとこであいった。妹いもうとは他た国こくへ嫁とついだ。これも急きゆう場ばのまあ合あうようきゆうに、おいそれよと呼よび寄おんせられる女おんなではなきようだいさんにんにいちばんべんりな

はやはり書生しょせいをしている私わたしだけであった。その私が母つどおのいい付けがっこう通りかぎょう学校の課業ほうを放り出し、
休み前やすまえに帰かえって来たという事が、父おおには大きな満足まんぞくであった。

「これしきの病き気に学校どくを休やすませては気の毒どくだ。お母おおさんがあまりぎょうさん仰山てがみな手紙かを書くものだからいけな

父ちちは口くちではこういった。こういったばかりでなく、今いままで敷しいていた床とこを上げさせて、いつものような元げんき気を示しめした。

「あんまり軽かるはずみをしてまた逆回ぶりがえすといけませんよ」

私のこの注意ちゅういを父ちちは愉快ゆかいそうにしかし極きわめて軽かるく受うけた。

「なに大丈夫だいじょうぶ、これでいつものように要心ようじんさえしていれば」

実際じっさい父ちちは大丈夫だいじょうぶらしかった。家いえの中なかを自由じゆうに往來おうらいして、息いきも切れなければ、眩暈めまいも感かんじなかつた。ただ顔色かおいろだけは普通ふつうの人ひとよりも大變たいへん悪わるかったが、これはまた今始はじまった症しょうじょう状じょうでもないので、私わたしたちは格別かくべつそれを気きに留とめなかつた。

私わたしは先生せんせいに手紙てがみを書いて恩借おんしゃくの礼れいを述べた。正月上京しょうがつじょうきょうする時ときに持参じさんするからそれまで待まちってくれるようにと断ことわつた。そうして父ちちの病状びょうじょうの思おもったほど陰悪けんあくでない事こと、この分ぶんなら当分とうぶん安心あんしんな事こと、眩暈めまいも嘔気はきけも皆無かいむな事ことなどを書き連かねた。最後さいごに先生せんせいの風邪ふうじゃについても一言いちごんの見舞みまいを附つけ加くわえた。私わたしは先生せんせいの風邪ふうじゃを实际じっさい軽かるく見みていたのだ。

私わたしはその手紙てがみを出す時ときに決けつして先生せんせいの返事へんじを予期よきしていなかつた。出あした後あとで父ちちや母ははと先生せんせいの噂うわさなどをしながら、遥はるかに先生せんせいの書齋しよさいを想像そうぞうした。

「こんど東京とうきょうへ行くときには椎茸しいたけでも持もって行いってお上あげ」

「ええ、しかし先生せんせいが干ほした椎茸しいたけなぞを食くうかしら」

「旨うまくはないが、別べつに嫌きらいな人ひともないだろう」

私わたしには椎茸しいたけと先生せんせいを結むすび付つけて考かんがえるのが変へんであった。

先生の返事が来た時、私はちょっと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかった時、驚かされた。先生はただ親切ずくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった。もっともこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一という私と先生の間^{あいだ}に書信の往復^{しよしん}がたびたびあったように思われるが、^{じじつ}事實は決してそうでない事をちょっと断わっておきたい。私は先生の生前^{せいぜん}にたった二通の手紙しか貰っていない。その一通は今^{いまま}いうこの簡単な返書^{へんしよ}で、あとの一通は先生の死ぬ前^しとくに私宛^{まへ}で書いた大変長いものである。

父は病気の性質^{びやうき}として、運動^{うんどう}を慎まなければならないので、床を上げてからも、ほとんど戸外へは出なかった。一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万^{まんいち}を氣遣^{きづか}って、私が引き添^ひうように傍^{そば}に付いていた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑^{わら}って応^{おう}じなかった。

にじゅうさん
二十三

私は退屈^{わたくし}な父の相手^{たいくつ}としてよく将碁盤^{ちち}に向かった。二人とも無精^{しょうぎばん}な性質^むなので、炬燵^{ふたり}にあたたまったまま、盤^{ぶしよう}を櫓^{たち}の上^{こたつ}へ載^のせて、駒^{こま}を動か^{うご}かすたびに、わざわざ手^てを掛^{かけ}蒲団^{ぶとん}の下^{した}から出^だすような事^{こと}をした。時々持駒^{ときどきもちごま}を失^なくして、次の勝負^{つぎ}の来^{しょうぶ}るまで双方^くとも知^{そうほう}らずにいたりした。それを母^{はは}が灰^{はい}の中^{なか}から見^{みつ}付け出^だして、火箸^{ひばし}で挟^{はさ}み上^あげるとい^{こっけい}う滑稽^{こっけい}もあった。

「碁^ごだと盤^{たかす}が高過^{うえ}ぎる上^{あし}に、足^{あし}が着^ついているから、炬燵^うの上^うでは打^うてないが、そこへ来ると将碁盤^{しょうぎばん}は好^いいね、こうして楽^{らく}に差^させるから。無精^{ぶしようもの}者^もには持^こって来^こいだ。もう一^{いちばん}番^{ばん}やろう」

父は勝^かった時^{とき}は必^{かなら}ずもう一^ま番^まやろうとい^まった。そのくせ負^まけた時^まにも、もう一^ま番^まやろうとい^まった。要^{よう}するに、勝^{よう}っても負^{よう}けても、炬燵^{炬燵}にあた^{あた}って、将碁^{将碁}を差^{おとこ}したがる男^{はじ}であ^{はじ}った。始め^{はじめ}のう^{はじめ}ちは珍^{めづら}しいので、この隠居^{いんきよ}じみた娯楽^{ごらく}が私^私にも相^{そうとう}当^{きょうみ}の興^{あた}味^{すこ}を与^{じじつ}えたが、少^{すこ}し時^{じじつ}日^日が経^たつに伴^つれて、若^{わか}い私^私の氣^{きりよく}力^力はそのく^{しげき}らいな刺^{まんぞく}戟^戟で満^{きん}足^{きょうしゃ}できな^{にぎ}くな^{にぎ}った。私^私は金^{きん}や香^{きょう}車^{しゃ}を握^{にぎ}った拳^{こぶし}を頭^{あたま}の上^のへ伸^{おも}ばし^きて、時^{おも}々^き思^きい切^きったあ^きく^きび^きを^きした。

私は東京の事を考えた。そして漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分からないほど大人しい男であった。他に認められるという点からいえばどっちも零であった。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかった。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、歓楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭というのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸と直したい。肉のなかに先生の力が喰いこんでいるといっても、血のなかに先生の命が流れているといっても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまたいうまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がのつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐になって来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほや歓待されるのに、その峠を定規通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有っても無くっても構わないものように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滞在中にその峠を通り越した。その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解らない変なところを東京から持って帰った。昔でいうと、儒者の家へ切支丹の臭いを持ち込むように、私の持って帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思っても、いつかそれが父や母の眼に留まった。私はつい面白くなくなった。早く東京へ帰りたくなった。

父の病気は幸い現状維持のままで、少しも悪い方へ進む模様は見えなかった。念のためにわざわざ遠くから相当の医者を招いたりして、慎重に診察してもらってもやはり私の知っている以外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといい出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。

「もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母がいった。

「まだ四、五日いても間に合うんだろう」と父がいった。

私は自分の極めた出立の日を動かさなかった。

にじゅうし
二十四

東京へ帰ってみると、松飾はいつか取り払われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた景気はなかった。

私は早速先生のうちへ金を返しに行った。例の椎茸もついでに持って行った。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれと申しましたとわざわざ断って奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に入れてあった。鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持って見て、軽いのに驚かされたのか、「こりゃ何の御菓子」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊な小供らしい心を見せた。

二人とも父の病気について、色々掛念の問いを繰り返してくれた中に、先生はこんな事をいった。

「なるほど容体を聞くと、今が今どうという事もないようですが、病気が病気だからよほど気をつけなさいといけません」

先生は腎臓の病について私の知らない事を多く知っていた。

「自分で病気に罹っているながら、気が付かないで平気なのがあの病の特色です。私の知ったある士官は、とうとうそれでやられたが、全く嘘のような死に方をしたんですよ。何しろ傍に寝ていた細君が看病をする暇もなんにもないくらいなんですからね。夜中にちよっと苦しいといって、細君を起したぎり、翌る朝はもう死んでいたんですよ。しかも細君は夫が寝ているとばかり思ってたんだっていうんだから」

今まで楽天的に傾いていた私は急に不安になった。

「私の父もそんなになるのでしょうか。ならんともいえませんね」

「医者は何というのです」

「医者^{とてもなお}は到底治らないというんです。けれども^{とうぶん}当分のところ^{しんぱい}心配はあるまいともいうんです」

「それじゃ^い好いでしょう。医者^{いまはな}がそういうなら。私の今話したのは^き気が付かず^つにいた人^{ひと}の事^{こと}で、しかもそれが^{らんぼう}ずいぶん^{ぐんじん}乱暴な軍人なんだから」

私は^{あんしん}やや安心した。私の^{へんか}変化を^{じつ}凝と^み見ていた先生^{せんせい}は、それから^つこう^た付け足した。

「しかし^{にんげん}人間は^{けんこう}健康にし^{びょうき}ろ病気にし^{もろ}ろ、どっちにしても^{もろ}脆いものですね。いつどんな事^{こと}でどんな^し死^しによ^しうを^しないとも^{かぎ}限らないから」

「先生も^{かんが}そんな事^いを^い考^いえてお出^いですか」

「いくら^{じょうぶ}丈夫^{まんざら}の私^{わたし}でも、^{まんざら}満更^{まんざら}考^{かんが}え^えない事^{こと}もありません」

先生^{せんせい}の口元^{くちもと}には^{びしょ}微笑^{かげ}の影^{かげ}が見えた。

「よく^{よく}ころりと^{よく}死ぬ^{しぬ}人^{ひと}がある^ある^るじゃありませんか。自然^{しぜん}に。それから^ああ^{おも}と思^まう^ま間^まに^ま死ぬ^{しぬ}人^{ひと}もある^ある^るでしょう。不自然^{ふしぜん}な^{ぼうりょく}暴力^{ぼりょく}で」

「不自然^{ふしぜん}な^{ぼうりょく}暴力^{ぼりょく}って何^{なに}ですか」

「何^{なに}だか^{なに}それは私^{わたし}にも^{わか}解^{わか}らないが、^{じきつ}自殺^{じきつ}する人^{ひと}は^{みんな}みんな^{ふしぜん}不自然^{ふしぜん}な^{ぼうりょく}暴力^{ぼりょく}を^{つか}使^{つか}う^{つか}んで^{つか}しょう」

「すると^{ころ}殺^{ころ}される^{ころ}のも、やはり^{ふしぜん}不自然^{ふしぜん}な^{ぼうりょく}暴力^{ぼりょく}のお蔭^{かげ}ですね」

「殺^{ころ}される^{ころ}方^{ほう}は^ちち^ちっとも^ち考^{かんが}えて^えい^いな^いな^いか^かつ^つた。なるほど^{なるほど}そう^{そう}い^いえ^えば^ばそう^{そう}だ」

その日^ひは^{かえ}それで^{かえ}帰^{かえ}った。帰^{かえ}って^{ちち}から^{ちち}も^{ちち}父^{ちち}の^{ちち}病^{ちち}気^{ちち}は^{ちち}それ^{ちち}ほど^{ちち}苦^{ちち}にな^{ちち}ら^{ちち}な^{ちち}か^{ちち}つ^{ちち}た。先生^{せんせい}の^{せんせい}い^{せんせい}つ^{せんせい}た^{せんせい}自^じ然^{ぜん}に^じ死^しぬ^しと^しか、^{ふしぜん}不^ふ自^じ然^{ぜん}の^{ふしぜん}暴^ぼ力^{りょく}で^{ふしぜん}死^しぬ^しと^しか^{ふしぜん}い^{ふしぜん}う^{ふしぜん}言^ご葉^ごも、^{ことば}その^{ことば}場^ば限^{かぎ}り^{あさ}の^{いんしょう}浅^{あさ}い^{いんしょう}印^{いんしょう}象^あを^あ与^あえ^あただ^あけ^あで、^{あと}後^{あと}は^{あと}何^{なに}ら^{なに}の^{あたま}こ^{のこ}だ^{のこ}わ^{のこ}り^{のこ}を^{のこ}私^{わたし}の^{あたま}頭^{のこ}に^{のこ}残^{のこ}さ^{のこ}な^{のこ}か^{のこ}つ^{のこ}た。私^{わたし}は^{わたし}今^{いま}ま^{いま}で^{いま}幾^{いく}度^{たび}か^て手^てを^て着^つけ^つよう^つと^つして^つは^つて^つ手^てを^て引^ひっ^ひ込^こめ^こた^こ卒^そ業^{ぎょう}論^{ろん}文^{ぶん}を、^{ほんしき}い^{ほんしき}よ^{ほんしき}よ^{ほんしき}本^{ほん}式^{しき}に^{ほんしき}書^かき^か始^{はじ}め^{はじ}な^{はじ}け^{はじ}れ^{はじ}ば^{はじ}な^{はじ}ら^{はじ}ない^{はじ}と^{おも}思^{おも}い^{おも}出^だした。

その年の六月に卒業するはずの私は、ぜひともこの論文を成規通り四月いっぱい書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折って余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑った。他のものはよほど前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、余所目にも忙しそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改まったら大いにやろうという決心だけがあった。私はその決心でやり出した。そうして忽ち動けなくなった。今まで大きな問題を空に描いて、骨組みだけはほぼでき上がっているくらいに考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相当な結論をちょっと付け加える事にした。

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしょうといった。狼狽した気味の私は、早速先生の所へ出掛けて、私の読まなければならない参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうといった。しかし先生はこの点について毫も私を指導する任に当ろうとしなかった。

「近頃はあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」

先生は一時非常の読書家であったが、その後どういう訳か、前ほどこの方面に興味が無くなったようだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思い出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味をもち得ないんですか」

「なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほどえらくならないと思うせいでしょう。それから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らない恥のようにきまりが悪かったものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなったのでしょ。まあ早くいえば老い込んだのです」

先生の言葉はむしろ平静であった。世間に背中を向けた人の苦味を帯びていなかっただけに、私にはそれほどの手応えもなかった。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰った。

それからの私はほとんど論文に崇られた精神病者のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前に卒業した友達について、色々様子を聞いてみたりした。そのうちの一人は締切の日に車で事務所へ駆けつけて間に合わせてといった。他の一人は五時を十五分ほど後らして持って行ったため、危く跳ね付けられようとしたところを、主任教授の好意でやっと受理してもらったといった。私は不安を感じると共に度胸を据えた。毎日机の前で精根のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書庫にはいつ、高い本棚のあちらこちらを見廻した。私の眼は好事家が骨董でも掘り出す時のように背表紙の金文字をあさった。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向を南へ更えて行った。それが一仕切経つと、桜の噂がちらほら私の耳に聞こえ出した。それでも私は馬車馬のように正面ばかり見て、論文に鞭うたれた。私はついに四月の下旬が来て、やっと予定通りのものを書き上げるまで、先生の敷居を跨がなかった。

にじゅうろく
二十六

私の自由になったのは、八重桜の散った枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であった。私は籠を抜け出した小鳥の心をもって、広い天地を一目に見渡しながら、自由に羽搏きをした。私はすぐ先生の家へ行った。枳殻の垣が黒ずんだ枝の上に、萌るような芽を吹いていたたり、柘榴の枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかそうに日光を映していたりするの、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍しさを覚えた。

先生は嬉しそうな私の顔を見て、「もう論文は片付いたんですか、結構ですね」といった。
私は「お蔭でようやく済みました。もう何にもする事はありません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべきすべての仕事がすでに結了して、これから先は威張って遊んでいても構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、しきりにその内容を喋々した。先生はいつもの調子で、「なるほど」とか、「そうですか」とかいつてくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物足りないというよりも、聊か拍子抜けの気味であった。それでもその日私の気力は、因循らしく見える先生の態度に逆襲を試みるほどに生々していた。私は青く蘇生ろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。

「先生どこかへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い心持です」

「どこへ」

私はどこでも構わなかった。ただ先生を伴って郊外へ出たかった。

一時間の後、先生と私は目的どおり市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉を撿ぎ取って芝笛を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもって、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というもの鳴らす事が上手であった。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそむきを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖ざされたように蔭鬱した小高い一構えの下に細い路が開けた。門の柱に打ち付けた標札に何々園とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りになっている入口を眺めて、「はいってみようか」といった。私はすぐ「植木屋ですね」と答えた。

植込の中をうねりして奥へ上ると左側に家があった。明け放った障子の内はがらんとして人の影も見えなかった。ただ軒先に据えた大きな鉢の中に飼ってある金魚が動いていた。

「静かだね。断わらずにはいっても構わないだろうか」

「構わないでしょう」

ふたりはまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅が燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺色の丈の高いのを指して、「これは霧島でしょう」といった。

芍薬も十坪あまり一面に植え付けられていたが、まだ季節が来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬畠の傍にある古びた縁台のようなものの上に先生は大の字なりに寝た。私はその余った端の方に腰をおろして烟草を吹かした。先生は蒼い透き徹るような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。その若葉の色をよくよく眺めると、一々違っていた。同じ楓の樹でも同じ色を枝に着けているものは一つもなかった。細い杉苗の頂に投げ被せてあった先生の帽子が風に吹かれて落ちた。

にじゅうしち
二十七

私はすぐその帽子を取り上げた。所々に着いている赤土を爪で弾きながら先生を呼んだ。

「先生帽子が落ちました」

「ありがとう」

身体を半分起してそれを受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家には財産がよっぽどあるんですか」

「あるというほどありません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼のようだが」

「どのくらいって、山と田地が少しあるぎり、金なんかまるでないんでしょう」

先生が私の家の経済について、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであった。私の方はまだ先生の暮らし向きに関して、何も聞いた事がなかった。先生と知り合いになった始め、

私は先生がどうして遊んでいられるかを疑った。その後もこの疑いは絶えず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり思いつつでも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。

「先生はどうなんです。どのくらいの財産をもっていられるんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服装をしていた。それに家内は小人数であった。したがって住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪にはいり込まない私の眼にさえ明らかであった。要するに先生の暮らしは贅沢といえないまでも、あたじけなく切り詰めた無弾力性のもものではなかつた。

「そうでしょう」と私がいった。

「そりゃそのくらいの金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもっと大きな家でも造るさ」

この時先生は起き上って、縁台の上に胡坐をかいていたが、こういい終ると、竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直に立てた。

「これでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独り言のようであった。それですぐ後に尾いて行き損なつた私は、つい黙っていた。

「これでも元は財産家なんですよ、君」といい直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかつた。むしろ不調法で答えられなかつたのである。すると先生がまた問題を他へ移した。

「あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」

私は父の病気について正月以後何にも知らなかった。月々国から送ってくれる為替と共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟であったが、病気の訴えはそのうちにほとんど見当らなかった。その上書体も確かであった。この種の病人に見る顫えが少しも筆の運びを乱していなかった。

「何ともいって来ませんが、もう好いんでしょう」

「好ければ結構だが、——病症が病症なんだからね」

「やっぱり駄目ですかね。でも当分は持ち合ってるんでしょう。何ともいって来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思っただけ聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があった。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかった。